

ぼつとらいん ふろむ ほんごう

生き甲斐をもって生き抜くために／患者と医療機関の連帯でがん難民をなくそう モンブラン登山 20 周年記念日本縦断シンポジウム

1987 年夏、7 名のがん患者がモンブラン山頂に挑み、猛吹雪のなか 3 名が登頂に成功する。ニュースは世界を駆け巡り、多くの人たちに驚きと勇気を与えた。「全国の無数の人たちが間接的な生きがい体験をされたのではないだろうか」と、同行した伊丹仁朗医師は振り返る。登頂から 20 年を記念して、生きがい療法実践会とがん患者と家族・遺族の会であるどんぐりの会主催の日本縦断シンポジウムが 9 月 22 日の札幌をはじめとして全国 8 か所で開催された(写真は当日のプログラムより)。

その 1 つ、2007 年 11 月 18 日(日)、東京・御茶ノ水の全電通ホールで開催されたシンポジウムは、壇上の 6 人が、それぞれのモンブラン体験を語った。モンブランで絶壁から落ちそうになったところをガイドが止めてくれたと語る高安正明さん(81 歳)、モンブラン

は夫に生きる指針を与えてくれたと語る野村カツエさん、無謀だといわれたが生きることへの大切な登山だったと梶計子さん。正木智水さんは「モンブランは苦しみ^{くねぎ}の連続だった。雷と雪の中、足を引きずりながら……、いっそ自分に雷が落ちてくれと。思い出すのはそのこと」。紅一点、山頂を極めた番匠和美さんはその後も登山を続け、日本 100 名山はすべて登ったという。「当時、がんは禁句だった。しかし時代はどんどん変わっていく。モンブランは時代の変わり目だったのではないか」と中野喜美さん。

すばるクリニック院長で生きがい療法実践会を主宰する伊丹氏は、「がん対策基本法だけではがん難民問題は解決しない。必要な対策として①すべての病院にがん総合診療科を、②がん難民を支援する機関(窓口)の設置、③人命尊重、治らないとされる人々にも手を尽くした医療を」と講演し、続いて「私にとっても山は生きがい療法」という千葉県がんセンターセンター長の竜崇正氏は、「1 年以上の延命が可能なら抗がん剤をすすめる。その間に治療法が出てくるかもしれない」と千葉県がん対策推進計画大綱と予防への取り組みについて語った。モンブラン登山から始まったどんぐりの会の活動、20 年間変わらず患者を支えてきた医療者の存在。モンブラン挑戦を記念したシンポジウムは、その後 20 年、がん医療の現場がどのように変わったのかを一堂に会して考える一日となった。



●問い合わせ先：どんぐりの会(梶さん)
TEL/FAX 0425-84-9826 <http://www.dongurinokai.jp/>